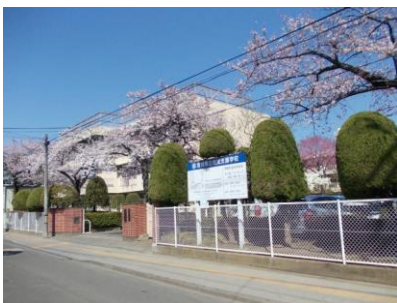
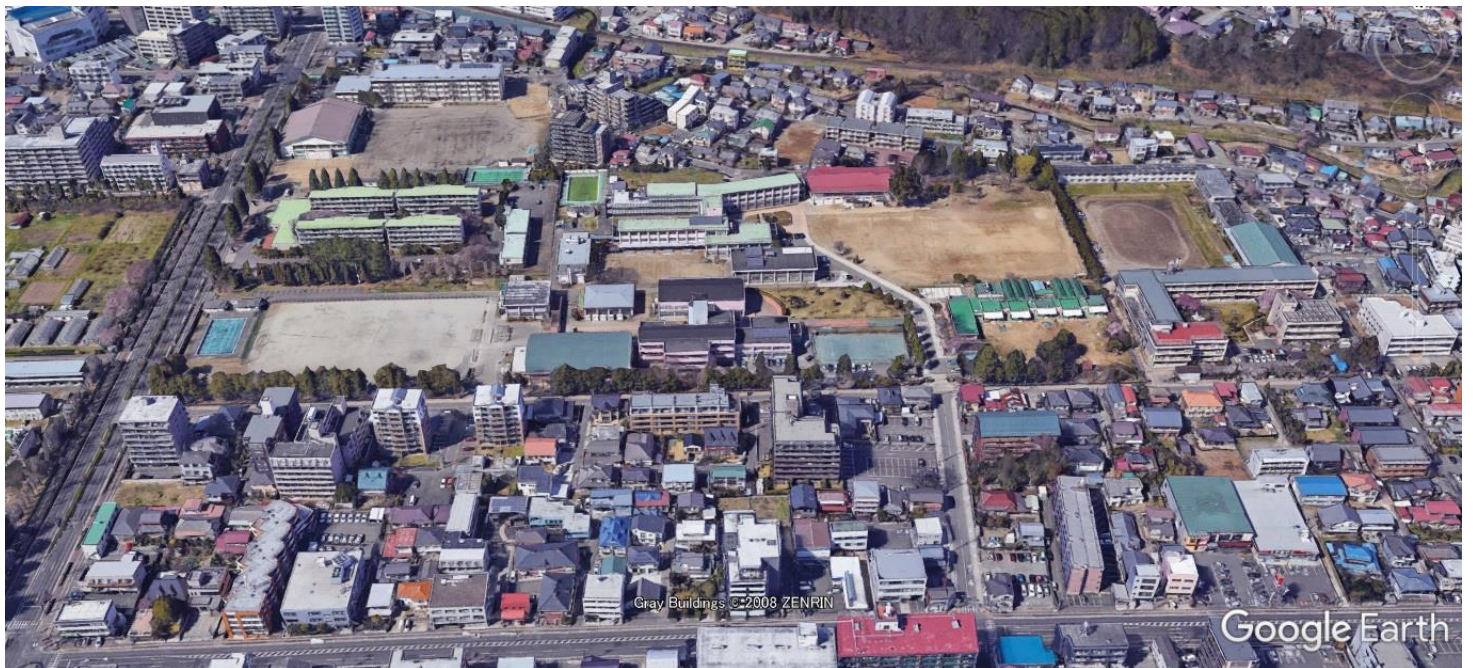


創立 5 0 周年記念

わが街の歴史と今



平成 3 1 年 4 月
北七東部町内会

目 次

1. 祝50周年

- ・お隣さんのご縁を大切に 梅田町内会長 木村純一 1
- ・町内会の思い出 ー白石にてー 元副会長 和泉長衛 2
- ・北七東部町内会50周年おめでとうございます 元副会長 渡辺眞木夫 4

2. 町内会活動を振り返って

- ・町内会のテリトリー 会長 亀谷英輝 5
- ・町内会の運営を考える 会計 白田 昭 6
- ・町内のコミュニケーション 会計 白田 昭 9
- ・「グリーン芳譜」の「保存樹林」指定に思う 会計 白田 昭 12
- ・バス旅行の思い出(写真) 会長 亀谷英輝 14

3. 老人会・子供会・学校

- ・楽しかった「あさひ会老人クラブ」・・ あさひ会元会長 千葉ミサ子 16
- ・子供会を通じて..... 子供会会長 市村君恵 17
- ・町内会地区の学校 会計 白田 昭 18
- ・「視覚支援学校見学会」に参加して 1班A 白田 昭・瑠美子 20

4. 街並み・神社・杜の都・軽便鉄道

- ・この辺の昔の様子 会長 亀谷英輝 23
- ・町内会の街並 ー変化と現在ー 会計 白田 昭 25
- ・朝日神社の思い出 1班A 植村謙一 39
- ・朝日神社にまつわる話 1班A 須藤宣毅 41
- ・朝日神社、仙台東照宮、瞑想の松 1班A 白田 昭 43
- ・「杜の都・仙台」ー〈杜〉と〈森〉・樹木の役割と機能ー 白田 昭 45
- ・軽便こ(仙台鉄道)の思い出 会長 亀谷英輝 47

5. 町内に住んでいた人達

- ・過去に在籍した人物 あれこれ 会長 亀谷英輝 49
- ・小説家「北 杜夫」は、すぐ近くに住んでいた！ 1班A 白田 昭 50
- ・渡辺萬次郎さんと「町のスケッチ」 会計 白田 昭 51
- ・「渡辺萬次郎さんの仙台風景スケッチ」展..... 会計 白田 昭 52
- ・長谷川昭衛さんの思い出 会計 白田 昭 54
- ・猪岡 光さん 会計 白田 昭 55
- ・鉄道趣味の亀谷さん 会計 白田 昭 56

・「お世話になった人達」	1班A	白田 昭	58
--------------	-----	------	----

6. 忘れ得ぬ出来事

・2. 25火災事件(昭和32年)	2班	長谷川厚生	59
・昭和41年9月25日梅田川の洪水(写真)	会長	亀谷英輝	60
・「東日本大震災」2011.3.11 との遭遇	1班A	白田 昭	61

7. 昔を懐かしむ

・タイムスリップ	3班	板垣英夫	64
・昔を懐かしむ	7班	高橋まい	66
・子供の頃の生活と思い出	1班A	白田 昭	67

8. 町内会と私と趣味

・シニア健康エクササイズ	9班A	寒河江正	70
・俳句	9班A	寒河江正	71
・北七東部町内会で12年目を迎え	1班A	臼井 徹	72
・五十分の二	2班A	及川晃子	74

9. 資料

・(資料1) 役員・班長・行事・ご逝去(最近10数年のまとめ)	75
・(資料2) 20周年記念誌「二十年のあゆみ」(昭和63年発行)の概要	77
・(資料3) 町内会の活動	78
・(資料4) 防災への対応(頭の体操をかねて)	80
・(資料5) 梅田町内会50周年記念誌	83
・(資料6) 仙台のあゆみ	84
・(資料7) 「行きたい！！オトナの工場見学」	85
・(資料8) 朝日神社 縁起(えんぎ)	86
・(資料9) 北七東部町内会周辺の地図の移り変わり	87

10. 編集後記	副会長	臼井 徹	89
----------	-----	------	----

「視覚支援学校見学会」に参加して

1班A 白田 昭・瑠美子

今年(2018)の9月4日、近隣住民を対象とした初めての「見学会」が開催された。町内会の皆さんに連絡する時間が少なかったこともあって、参加者は4人と少なかった。北七東部町内会からは私と妻が、梅田町内会からは会長の木村さんと尾花さんが参加した。我々が知らなかったことも多く、また、心に残ったこともあった。そこで、町内会の人にもっと知ってもらいたいと思い、感想を中心にまとめてみた。

「見学会」のプログラムは以下の通り

1. 開会行事：校長挨拶、ビデオによる説明、質疑応答、校舎・寄宿舎の見学
2. 授業公開：小学・中学・高校、専攻科(あん摩・マッサージ・指圧、はり・きゅう)

①担当の中澤由美子さんの司会で、菅井理恵校長が挨拶。

②及川幸樹教頭が、紹介ビデオを使って概要を説明、そのあとに質疑応答(Q&A)

Q: 目が見えなくなった場合には、本人だけでなく親御さんにも精神的打撃が大きいと思いますが、どんな心のケア、支援、教育をしているのでしょうか？

A: それぞれですが、大きくなってから視力を失った場合は大変です。支えるように気を配りますが、ここの生徒さんとの交流や、同じ経験をした人の話も大切です。

Q: 前は「盲学校」でしたが、「視覚支援学校」と変わりましたね。それは「盲」の字を使わないという方針からですか？文化祭に「宮盲祭」と使っているようですが？

A: 宮城県で一斉に変えた時に変わりましたが、「盲学校」でも全くかまいません。

Q: 卓球などのスポーツも楽しんでいるようですが、サッカーボールと同じようにボールに鈴などを入れて音を出しているのですか？

A: 音が鳴るボールもあります。ネットの下が開いており、台の上を走らせるラリーを楽しんでいます。台の脇から玉が落ちないような工夫もしてあります。

③校舎・教室・寄宿舎を案内されて

*弱視や全盲の方がいて、それぞれにあった授業を、マンツーマンで行っていた。
・国語・・・弱視の方が、本を機械で拡大し、読み上げていた・・・その後で問題を解く。
・地理・・・全盲の人が、先生の読む声を聞きながら「点字」を打っていた。慣れているとはいえ凄く速い。「間欠泉」の話らしく「自噴」との言葉も、「自分の”じ”」「噴水の”ふん”」との説明も。「どうして、その説明で分かるんですか？」と聞くと、「前に、字の

立体コピーを触って覚えているからで」とのこと。

・英語・・・弱視の人が字を拡大し、目を近づけて見、テープを聞きながら、復唱していた。感心したのは、誰もが一生懸命努力していたこと、「半端ないなー」と。

・「はり」の実習・・・先生の腕に「鍼(はり)」を打つ練習、何度も打たれるのは大変だと思う。歳を取った人が先生かと思ったら逆で、若い人が先生とのこと、思わず笑ってしまった。歳取った人の方が、先生のような口ぶりで話していたので。

・「あん摩」の実習・・・先生がツボや揉(も)み方を教えていた。揉んでいる人が生徒で、揉まれている人が先生でした。男性の先生はこの学校の出身者、女性の先生は日本語の上手な中国人、2人とも目が見えないという。

＊外の廊下を歩いていると「ここが食堂で、昼食は全員そろって頂きます」。熱いのは熱く、冷たいのは冷たく食べられるという。できたての食事がうれしそう。香りも漂ってきて、思わず食べたくなってしまった。生徒にとっては、大切な時間だろう。

＊図書室も案内してもらった。大きな文字の本や点字の本が多かった。驚いたのは、英語の辞書が、全て点字で書かれていたこと。1冊の辞書が、大きな20冊ほどに翻訳されている。何巻に書いてあるか、それはどこにあるか、探すだけでも大変だ。

＊目が不自由な人のためのコピーも見せてもらった。特殊な紙に地図を書いてコピーすると、書いたところが盛り上がってくる。それを手で触ると、形が分かるのだ。ただし、特殊な紙で1枚100円近く、コピーするときは失敗しないように緊張するという。コピー機も高く、約100万円、しかも外国製だという。その話を聞きながら、日本でも開発できるように、国から会社に援助金が出せないだろうか、つい思ってしまった。

＊ガラス戸の中には、鳥や動物の剥製(はくせい)、草鞋(わらじ)や簀(みの)、柱時計(針を動かせる昔のタイプ)などが、一杯入っていた。「どんなときに使うのですか？」と聞いたら、「昔話を話すときに、草鞋と言っても分かりません。実物を触ってもらいと納得します」とのこと、「なるほど」と納得。「時計も、手で針に触れた方が理解しやすいのです」。「確かに、そうだろうな」と、うなずく。

＊長い廊下に、いくつもの教室が並んでいる。自分の教室をどう探しているのだろう。曲がって何歩目が自分の教室だと覚えるのだろうか？と思ったら、入口付近に、おもちや・飾り・お人形がぶら下がっていた。手を軽く壁に向けて歩くと、それに手が触れ、何の教室か分かるという。「うまい方法だ！」と感心してしまった。

* 宿舎も見学させてもらった。病院で見られるようなベット、ただ色は白でなく黒。どの部屋でも、布団は綺麗にたたまれていた。以前より入る人が少なくなったのだろうか、空いてる部屋もあった。小さい子は小学の低学年とのこと、親元を離れて生活するのは寂しいだろう。交代で、常に3人の担当が宿直し、対応しているとのこと。

* 庭には、滑り台、ブランコ、ジャングルジムがあった。ここで遊ぶのだろうか？、危険も伴うのに。その点は、校舎を見せてもらったとき納得した。2階から地面まで大きな滑り台が2個設置されていた。火事などの非常時に、それを使って避難するのだろう。遊びの滑り台は、その時のいい訓練になる。遭遇する危険にも対応しているのだ。

例えば、バラは人気の花で出会うチャンスも多いが、トゲに触って傷つくかもしれない。「トゲがあるので注意してね」と言った後で触らせ、トゲの危険さを教えるという。「そのあとは、バラに触る時、気をつけるようになるんですよ」とのこと。

* 案内して下さる職員の方に、いろいろ聞きながら歩いていた。すると、職員さんの前向きな姿勢を強く感じ、ここで授業を受けられる生徒さんは幸せだなと思った。

生徒が前向きに生きるためにも、国や県は十分援助してほしい。学校を卒業した人達が自立し、自活できるような環境作りも含め、温かく長い支援を、と思う。

* 帰り際、「この職員になって、自分が変わった事ってありますか？」と聞くと、

「ええ、思いやりの気持ちちが、自然に出てくるようになりました」

私達への案内・説明からも、皆さんの気持ちを十分感じとることができた。

4人だけで聞くのは、もったいないな！と感じた「学校見学会」であった。

追記)

① 本校への入学資格：見える人でも矯正視力が0.3未満の人なら入れる。この弱視の症状は人によって異なり、視野の広さ・形・明るさ・ゆがみ・色など多様だ。

② 「あん摩・マッサージ指圧師」「はり師」「きゅう師」分野では、国家試験に向けた指導を行っている。臨床実習として、誰でも、施術を受けることができる。受付電話は022-234-6333(内線20)。施術料は800円、年1000人以上が受けている。

③ 2020年にはオリンピック・パラリンピックが東京で開かれる。目が見えない人も陸上、競泳、柔道、自転車、ゴールボール、サッカー、セーリング、馬術、などに出場できるようだ。

また、社交ダンス界でも、ブラインド・ダンス(目の見えない人と見える人がカップル)が、

ボランティアに支えられ広がっているという。

朝日神社、仙台東照宮、瞑想の松

1班A 白田 昭

○朝日神社

町内会区域の北東角、視覚支援学校の東隣に朝日神社がある。敷地内には阿部宅があったが、2016 年3月解体された。神社は大きな杉と大イチョウが目印。イチョウは、秋に銀杏を一杯つける。かつては拾って食べる人が多かったが、今は一面に散らばり、匂う。銀杏は駐車場の車にも落ちるため、2018 年に伐採された。



朝日神社は、上杉四郵便局(北四番丁・二本杉通り交差点)の風景印として今も使われているが、3班の阿部絹枝さんが図案化したものだ(町内会20周年記念誌より)。

神社の管理者は、中山鳥瀧不動尊の宮司・庄司さん(Tel022-277-4575、青葉区中山 6-19)、松尾神社の宮司さんのお父さんである。

社(やしろ)が建てられたのは千年以上も前。「朝日」の名は、1189 年、源頼朝が奥州征伐の折りに参拝した際、朝日が昇ってきたことが由来とされている。



社は 2016 年に解体、翌年新築された。右は元旦の新しい社の内部。扉の右下に置かれた陶磁製の笑顔の子供たちがかわい。朝日神社については、1班 A の植村さんと須藤さんの文、および資料の「縁起」をご覧ください。



○仙台東照宮

この地は、徳川家康が天正 19 年(1591)、葛西大崎一揆の視察に来て、伊達政宗と宿陣した所だ。今の榴岡(つつじがおか)天満宮が、一時(1551～1667)あったという。

城下が拡張された時(正保・寛文年間:1644～1673)、東照宮から南へ花京院通りまで門前町(宮町)ができた。藩主が在仙する年の祭の時には、ここを起点に山鉾(やまほこ)が城下を練り歩いた。宮町の賑わいは、江戸以北で一番であったという。

仙台の東照宮は、2代藩主伊達忠宗が3代将軍徳川家光に、東照大権現の仙台への勧請(かんじょう=神仏の分霊を迎えること)を願い出て、承応3年(1654)に5年の歳月をかけて完成した。大工 13 万人、総工費2万両を要した大事業だったという。

昭和10年8月、火災により幣拝(へいはい)殿・神饌(しんせん)所が焼失したが、昭和39年に復旧。本殿・唐門・石燈籠・石鳥居などは重要文化財に指定されている。昭和53年(1978)に唐門と透塀(すきべい)の大修理が、昭和55年(1980)には本殿の修復工事が行われた。東日本大震災の時には、参道石段の石燈籠34基中14基が崩壊したが、3年後に修復された。

ここは、1月の初詣・どんと祭、4月14・15日のお祭り(露店50が並ぶ)、骨董市、フリーマーケットなど、今も多くの人が集まり賑わっている。境内にある数種の桜を楽しみにしている人も多いようだ。



○瞑想の松(一本松)

朝日神社から北へ1.5キロ行ったところに、有名な「瞑想(めいそう)の松」がある。樹齢は650年を超える。今は、東北薬科大の敷地内にあり、松の隣にはコンクリート製の丸い展望台も作られている。

明治の文豪・高山樗牛(たかやま・ちよぎゅう、1871-1902)は、旧制二高在学中、かなわぬ恋を嘆き、この地を散策、松の木の下で瞑想に耽(ふけ)ったと言われる。友人の土井晩翠(1871-1952)が、そのことをつぎのように詠んだ:

「いくたびか こゝに真晝(昼)の 夢見たる」



一方で、ちょっと違った説もある。

高山樗牛は、この松の木の下に立って遠く、杜の都(仙台)のいらか(瓦ぶきの屋根)を望み、西に蔵王の山なみを仰ぎ、東の彼方に松島を眺め、「人生とは何ぞや」、「人間如何に生きるべきか」と思い悩み、一人瞑想していた、というものである。

後者の場合、句碑の「真晝」を「真理」と解釈している人もいるようだが、自分が見た感じでは「真晝(昼)」と読む方がしっくりくる。どちらの説が正しいかは、よくわからない。両方あったような気がするし、その方が人間らしい。いずれにしても、記念碑が長いこと(75年?)維持され、市民に慕われてきたことは事実である。

今の時代、たまにはここを訪れて、瞑想するのもいいかもしれない。

「杜の都・仙台」 ―〈杜〉と〈森〉、樹木の役割と機能―

会計 白田 昭

1. 〈杜〉と〈森〉

仙台のことを「杜(もり)の都」という。これを「森の都」と書いてもいいのだろうか？
そもそも〈杜〉と〈森〉は、どう違うのだろうか？ 知らなかったので、調べてみた。すると、「〈森〉は、樹木が山などに自然に育ってできた天然樹林のことで、〈杜〉は、人が環境に配慮しながら整備した自然林のことである」(一部改変)とあった。すなわち、手を加えて街や里に作った森や林のことを、〈杜〉と書くようだ。

伊達政宗(独眼竜政宗)が積極的に植林を勧めたため、城下町には多くの「屋敷林」が作られた。その結果、あたかも樹林の中に街ができたかのような美しい街並みになったと言われている。大正5年頃からは、〈森〉に替えて〈杜〉の字が使われ、「杜の都」が定着したとのこと。なお、〈杜〉には「神霊の宿る森」との意味もあるそうだ。

終戦直前の空襲で、仙台の街は焼け野原になり、樹林もなくなってしまった。市は緑を取り戻すために、市街地に樹を植え始めた。数十年後、大きく成長した青葉通や定禅寺通のケヤキは、仙台の新しいシンボルとなった。その時々に応じて、仙台では樹木(緑)を守る努力をしてきたようだ。「人々が長いこと手をかけ残し続けてきた樹林は、仙台の宝である」というのも、うなずける気がする。

しかし、最近は街の緑が少なくなっているようだ。上空から仙台の写真を見ると、大きなビルが立ち並び、駐車場もだいぶ増えている。町内会付近では、2017年の東北大学農学部の移転に伴い、敷地内にある大きな樹木がだいぶ伐採されている。保存運動もあったようだが、どれくらい残るのか、今はわからない。人間の経済活動は、仙台の地域環境まで崩しつつあるようだ。

2. 樹木の機能と役割

①光化学スモッグを防ぐ

かつて僕は、東京・杉並・東高円寺にある蚕糸試験場にいた。そこは「環七通り」と「青梅街道」の交差点の近くで、交通量も非常に多かった。昭和46年頃だったか、光化学スモッグ濃度が高まり、近くの校庭で多くの生徒が倒れ、何度かニュースになった。しかし、試験場内のテニスコートにいた職員達には、何の異常も見られなかった。学校と100m、交差点から50mも離れていないのになぜ？、と不思議に思った。

試験場の研究者が光化学スモッグの濃度を測定したところ、場内の濃度は道路の1/10～1/100であった。試験場はヒマヤラスギなど大きな樹木に囲まれていた。彼

は、それらの樹木が光化学スモッグを防ぎ・濃度を低減させたことを解明し、公表した。それを知ったとき、「植物の力は大したものだ」と感心したことを覚えている。

②「森林浴」と「フィトンチッド」

「森林浴」という言葉がある。森林の中に身を置いたり散歩すると、健康にいいようだ。かつての不治の病・結核の療養所は、森や松林の中にあることが多かった。その理由は、樹木成分が患者の治療や回復に有効だったから、と聞いている。

近年は、樹木の揮発成分の抗菌作用だけでなく、癒やしや安らぎを与えるリラクゼーション効果も注目されている。森で深呼吸をすると、脳内のα波が増えて気分が落ちつき、さわやかさを感じるという。

樹木が発散する揮発性成分は、「フィトンチッド」(植物の殺し成分)と呼ばれている。それは、その成分に強い殺菌作用・殺虫作用が認められるからだ。フィトンチッドは植物の種類それぞれに特有な成分の総称で、ヒノキの香りのもと「ヒノキオール」もその一つである。森林には多種類の植物があるため、多くのフィトンチッドが複雑に関わり、さまざまな影響を生物に与えている。

フィトンチッドには、強い空気浄化作用や消臭作用もある。そのため、森の中で動物の糞尿や死骸が著しい悪臭を発することはないという。また、オゾン等の有害物質を低減するだけでなく、シックハウス症候群の原因物質(ホルムアルデヒド)も中和・低減させることがわかっている。

ちょっと視点を変え、フィトンチッドが植物自身にどんな役割を果たしているかも見たい。植物が傷ついたり、病原菌に侵されたり、害虫に食べられると、発散量が急に増えることが知られている。樹木は自らを守るために、フィトンチッドを増産し発散させているようだ。また、害虫に侵された葉は、ある種のフィトンチッドを発散させる。風と共に周囲の葉に運ばれると、その情報を得た葉は害虫の嫌がる成分を多量に作りだす。害虫はその葉を食べることができず、結果として、植物は生き伸びるという。

③自分を守る他の機能

ある種の植物は自分が有利に繁殖するため、他の植物や雑草が生えてこないような忌避成分を、根から出している。これは、外来種のセイダカアワダチソウが日本中に繁茂した主たる理由でもある。

他の機能も知られている。例えば、植物が病原菌に侵されると、抗菌成分を新たに生産し、そこに菌を封じ込め殺してしまう。この抗菌成分は「ファイトアレキシン(植物由来の毒)」と呼ばれる。自分が研究したクワ枝でも、菌に侵されると、周辺に抗菌性の未知物質「モラシン」を生産し、病斑の拡大を防いでいた。植物って、スゴイなあ！

小説家「北 杜夫」は、すぐ近くに住んでいた！

1班A 白田 昭

「北杜夫—どくとりマンボウの生涯—」展が、仙台文学館で2015年4月25日から開催された。終わりまで数日というとき、珍しく家内に誘われ、見に行った。

北杜夫は、歌人で医師・斉藤茂吉の次男、兄はエッセイストで精神科医の斉藤茂太。1927年東京で生まれ、少年時代は昆虫採集に熱中していたという。昭和23年、東北大学医学部に入学し、医学と文学の道を歩むことに。「どくとりマンボウ」シリーズで人気を得、33歳のとき「夜と霧の隅」で芥川賞。以降、小説、エッセイとも支持され、人気作家となった。「楡家の人びと」で毎日出版文学賞をもらったほか、日本文学大賞、大佛次郎賞も受賞している。

文学館で大きな仙台地図を見ていた妻が「ねえー、ねえー、家の近くに住んでいたみたい」と興奮して言ってきた。学芸員の方に聞くと、昭和24年5月から28年春まで、北七番町の渡辺重蔵宅に下宿していたとのこと。説明文には「気ままにさせてくれたので、大変気に入った」とあった。今、その家には、重蔵氏の孫で町内会の副会長だった渡辺真木夫氏が住んでいる(2015 年8月、塩竈へ転居予定)。地図の横には、渡辺宅の写真が3枚(家全体、玄関の格子、階段)が展示されていた。聞くと、学芸員がこの年に撮りに行ったとのこと。「玄関の格子」の明暗が素敵である。

隣のケースには、北杜夫から渡辺宅に送られてきたハガキ5枚が展示されていた。よく見ると、渡辺真木夫氏・渡辺不二夫氏(弟さん)からの寄贈と書いてあった。新しいのは平成8年元旦に届いた短歌・・・長い付き合いがあったことを示している。

別室ではDVDが放映されていた。2009年、東北大学資料館が作成した「マンボウ青春記・・・仙台の北杜夫を語る・・・」である。DVDの中で渡辺多美子さん(真木夫氏の叔母さん)が、下宿先での彼を、楽しそうに話していた。

「お茶が好きなので、ヤカンにお茶を入れておくと、彼は新聞を見ながら茶碗について何杯も飲んでいるの、よくこぼさないもんだと感心したわ、フフフ」

「サンマの肝を取り除いて焼いてあげたら、肝は取らずに焼いてください、そこが一番おいしいんだからと・・・今もサンマを焼く時には思い出すの」

そのころ彼は、勉学に励んでいた・・・のではなく、マンガに将棋、卓球・野球・ダンスなどに明け暮れていたようだ。「気ままにさせてくれたので、大変気に入った」という理由の一つが見えてくる。この北七番町の渡辺宅で、北杜夫は青春を満喫していたのである。そんな1ページを知ると、何か嬉しくなってしまう。(2015.7)

「東日本大震災」2011. 3. 11との遭遇

1班 A 白田 昭

そのとき私は、黒松市民センターにいて、大きな揺れを感じた。直ぐ収まるだろうと様子をみていたが、揺れは増々大きくなってゆき、建物が崩壊する危険を感じたので駐車場に逃げた。はじめは立っていたが、すぐ立っていられなくなり、しゃがみこんだ。揺れはさらに大きくなり、周りを見ると自動車がジャンプするかのように揺れている。これは大変なことになる！と、鳥肌が立った。

大きな揺れが収まったので、すぐ自動車に乗り、安全運転で家に向かった。信号はすべて消えていた。交差点では、お互いの車を見ながら、ゆっくり走った。

家に帰ると、家内がビックリしたような顔をしており、ちょっと震えているようにみえた。聞くと、大きなテーブルの下にもぐっていたとのこと。テレビが大きく動き、パソコンが倒れていた。棚は柱とつないでいたので大丈夫だった。冷蔵庫は 20 センチほど動いただけで、揺れの割には被害は少なかった。しかし後で見ると、二階の屋根瓦が 2～3 割落ち、小さなヒビが、ブロック塀・家の土台や壁に何本か認められた。

まず頭に浮かんだのは「断水」であった。そこで、ヤカン、ナベ、ペットボトル、ゴミ袋、風呂など、総動員して水を溜めた。これで1週間は持つだろう。しかし、結果的に水道は止まらなかった。これだけの地震で水道が止まらなかったのは奇跡に近い。農学部では何本かの配管から水が噴き出し、大元のバルブを閉めざるを得ず、復帰まで1ヵ月ほどかかっている。

今回の地震では、1～2階建の家での被害は少なかったが、マンションの上の階では揺れが大きく、床には壊れたガラスが散乱した家もあった。マンションに住んでいる人は余震への不安も大きく、避難した人が多かったようだ。避難した所は付属中学校と上杉山中学校である。

付属中学校は「避難場所」に、上杉山中学校は「避難所」に指定されている。

しかし、「場所」と「所」との違いを知ってる人は極めて少なく、混乱を招いた。

・「避難場所」は、災害時に一時避難する場所で、大きな公園や緑地、校庭など、屋外が対象である。ビルなどが崩壊する危険がある時に、一時避難する安全地帯だ。

・「避難所」は、災害で住む家を失った人の生活場所になる所で、食料や水の備蓄、トイレなどがある。避難した住民は、災害の危険性がなくなるまで滞在することができる。長引いた時は、水や食料などの物資援助も行われる拠点施設である。

しかし、多くの人は地震で混乱しており、「避難場所」と看板が出ているのに付属中

学が校内に入れてくれなかったことに不満を持った。改善法はないのだろうか？ 1日だけでも雨風をしのぎ、水道とトイレを使わせてもらえるだけでもありがたいと思うのだが。今は、誤解のないよう「建物の中には入れません」と看板に書かれている。

当日の夜は、救急車などのサイレンが鳴り響いていた。停電なので、テレビは見られず、蛍光灯もつかず、ラジオと懐中電灯がよりどころであった。余震も多く、寝ていても揺れているような錯覚に陥ることもあって、ビックリした。電話や携帯もつながらず、2～3日はあまり情報が得られなかった。

このような状況の中で、「河北新報」は休むことなく配達され、その底力に感服した。河北新報社は、新潟日報社に紙面制作を依頼し、被害を免れた印刷センターで印刷、震災当日の号外と翌日の朝刊を発行したのである。この時の津波被害の写真は、今も忘れられない。

電話やメールは使えるが、ほとんど通じない状況が続いた。安否情報をどう伝え、どう知るか？ そこで、災害用伝言ダイヤル「171」に伝言メッセージを入れておいた。すると、東京にいた息子がそれを聞いて、我々の無事を知ったという。意外と役にたつものだ、と認識を改めた。メールは電話より早く、13日頃から通じるようになった。なお、病院(医院)の電話は、普通の電話より通じやすいようである。

寒かったが、電気が来ないので石油ファンストーブは使えない。持ってる人は少ないが普通の石油ストーブは、上でお湯も沸かせ、煮炊きもできるので重宝された。電気の回復は早く、13日の16時であった。回復はありがたかったが、テレビで津波の映像を見て唾然(あぜん)となった。これほどとは・・・言葉が出なかった。

巨大地震で道路が使えなくなると、生活資材が入らなくなる。仙台でも少ない商品を求める客であふれた。水、卓上ガス、電池、トイレトペーパーはすぐ品切れに、そして食品全般、お米なども入手困難になった。マッチやライターがなければ、ロウソクに火もつけられない。不便さを実感した。

車にガソリンを入れるのも大変。給油できるとわかると、自動車が道路沿いに並んだ。その列は異常に長くなり、何事かと思った。4～8時間待ちもあったと聞く。北六番町の郵便局には、トイレを借りるため何人かが駆け込んでいた。インターネット上では、どこそこのガソリンスタンドで給油できるとの情報が流れた。そんな状態が数日続いたあと、自動車の長い列が通行の邪魔になるとして、警察はガソリンスタンド側に対応策を求めた。その結果、スタンドでは給油の時間帯を示した整理券を並んだ車に配布することにした。この効果は大きく、並びはみるみる減っていった。スバラシイと

思うと同時に、なぜもっと早く実施できなかったのか、との思いも。

市ガスは、その日は使えたが、翌日には止まった。回復は遅れ、我が家で使えるようになったのは1ヵ月後の4月13日である。ガスが止まると、料理ができない、ガス風呂に入れないなど、きわめて不便である。電気風呂を持ってる方から「どうぞ入りに来て下さい」と言ってもらえたのはありがたかったが、七輪で大量のお湯を沸かし、風呂場で体を洗ったり、拭いたりした。

今回の大震災を経験し、近所の人との協力、情報交換が大切だと感じた。

また、非常時に役立つであろう以下の豆知識も参考になると思う。

- * 煮炊き : 卓上ガスコンロも意外と有用、七輪と炭は何年たっても使用できる
- * 寒さ対策: 体を新聞で巻き、ラップで包む、湯たんぽは、ペットボトルで作れる
- * 水確保 : ペットボトル、ヤカン、鍋、バケツ、ダンボールの中にゴミ袋2枚重ねて、浴槽(洗濯・水洗トイレ用にも)など・・・用途を考えて多めに確保する
- * ラップ : 茶碗など洗えないときは、皿などにサランラップを敷いて食べる
- * トイレ : ウンチは穴を掘り外で、あるいは新聞の上にしビニール袋に包み生ゴミへ
- * 薬 : 毎日飲む薬は、1～2週間分を保存しておくことが望ましい。
- * インターネット: いろいろな情報が得られ役立つ。AED(電気ショックで心臓の働きを戻す機器)、公衆電話の設置場所、危険地域、お店情報も探せる

最後に、東日本大震災のデータをまとめた(2011.5.11の河北新報などから)

- * 本震 : マグニチュード(M)9。震度: 栗原7、宮城野区6強、青葉区6弱
(1800年以降、地球上でM9以上の地震は、8回起きているだけ)
- * 死者 : 1万5千人(宮城9千人、仙台680人)
- * 行方不明: 1万人(宮城6千人、仙台180人)
- * 避難者 : 12万人(宮城3万3千人、仙台2千人)
- * 断水 : 宮城45万戸
- * 断ガス : 宮城33万戸
- * 停電 : 東北466万戸(契約戸の8割)
- * 鉄道 : 東北新幹線は4月29日に全面復興した。常磐線は、沿岸の鉄路で23駅が流失し、放射線汚染も強いたため、全線再開は2019年度末の見通
- * 余震 : M5以上は446回。ピークは4月12日の126回、5月は1日30回以下
- * 福島原発: 地震と津波で停電により冷却がストップし、水素爆発が起きた
流出した放射能の量は、広島に投下された原爆168個分、危険度は

「4」から、チェルノブイリと同じランク「7」に変更された

追) 平成 23 年、町内会は総会の了解を得て、義援金 10 万円を振り込んだ。

子供の頃の生活と思い出

1班 A 白田 昭

私は、朝日神社の近くの自宅で 1944 年(昭和 19 年)に生まれ、ここで育った。今の住所は上杉 6 丁目 1-43 であるが、町名変更の前は北七番丁 1 番地。その旧住所を記した記念柱(辻標)が、わが家の前に立っている(写真・右)。



小学校は、目の前にあった東北大附属小(現・宮城教育大附属)に入った。面接の時、先生から「走って転んだらどうするの」と聞かれて、「逆立ちします」と答えた。正解は「起きます」だろう。だが、聞かれた時は、転んで両手をついて、そのまま逆立、一回転して立ち、また走るというイメージが頭に浮かんだようだ。先生は「ん、この子は大丈夫?」と思ったことだろう。でも、なんとか入学できた。

東北大から農林省へと進み、東京と「筑波学園都市」(今の「つくば市」)で研究することになった。テーマは「植物の病害抵抗性」。定年退職して戻ってくるまで、37年ほど仙台を離れていた。

母は花や野菜が大好きで、小さな畑を作って楽しんでいた。また、明るく社交的で、70歳から10年間ダンスサークルに通っていた。80~90歳は1人暮らしだったが、倒れたこともあって、近所の方や町内会の皆さんには大変お世話になった。そのことへの感謝もあって、亀谷会長から会計長を頼まれたときは、すぐ引き受けた。それから10年、まだ後任を見つけられずにいる。判断が甘かったのかもしれない。

考えてみれば、もう73歳(2017年)、気持は若いけど「老人=豊齢者?」になった。昔を振り返り、思い出を語る年齢である。というわけで、タイムトラベル、小学生の頃(60~65年前)を中心にわが町を振り返ってみたい。

まず、わが家の両隣。西隣には故・長谷川松治さん(東北大と東北学院大の名誉教授)が住んでいた。長谷川さんの、ルース・ベネディクトの訳書「菊と刀」は有名。現在、住んでいるのは長男の厚生さん達だが、平成22と23年に、お姉さんとお母さんを続けて亡くされた。

東隣は東北大学農学部教授の故・松平近義さん一家(子供は3人)が住んでいた。引っ越した後、佐藤のおばちゃん(青根温泉の青嶺閣のオーナー)が1人住まいして

いたが、やがて引っ越し、しばらく空き家に。その後、2軒が新築され、平成 19 年頃、若い家族、臼井さんと須藤さんが入居され、町内会の平均年齢を下げてくれた。

僕が小学生の時は、前の道路の両側(北側と南側)に小さな水路があった。道の南側は雨水などを流す小さな溝、いわゆる「どぶ」である。北側(視覚支援学校側)には幅50センチほどの水路があり、水を「田んぼ」に引き入れていた。水は綺麗で、小さなドジョウやフナが泳いでおり、手や網ですくい取ったものである。

朝日神社の東側は一面「田んぼ」であった。その頃は農薬もあまり使われていなかったため、蛍やイナゴも多かった。夏には団扇(うちわ)で蛍を取り、家に持って帰り蚊帳(かや)に入れて遊んだ。秋にはイナゴが捕れ、佃煮(つくだに)にして食べたが、形が苦手で好きになれなかった。冬になると、「田んぼ」は広場にもなり、凧揚げして遊んだ。しかし今、その面影はない。

附属中学校の道を挟んだ南側は野原と畑であった。小学生のとき、クラスでそこに花壇(野菜畑?)を作っていた。肥料は道で拾った馬糞。その頃はまだ農耕馬が通っていた。また、お百姓さんが便所(トイレ)の糞便をくみ取りにきていた。畑の肥料にするためだ。今では想像もつかない生活環境だが、のどかさもあった。冬には、小学校の校舎北側に区切りをつくり、先生が水を撒いて凍らせ、臨時スケートリンクをつくって遊ばせてくれた。昔は、今よりだいぶ寒かったような気がする。

道路は、比較的広い北六番町でも舗装されていなかった。二本杉通りは狭いにもかかわらず駅前までボンネットバス(前にエンジンがあり鼻のように出ているバス)が走っていた。その頃は一方通行になっておらず、バスがすれ違っていた。狭くて運転も難しかったようで、木造の電柱が数本、長い間に削れて少し痩せていた。

便利なものは何もない時代だったが、なぜか懐かしい。テレビ、洗濯機も、掃除機、冷蔵庫もない時代。だからこそ、それらが出回ってくるワクワク感を体験できた。下駄(げた)と足袋(たび)が、靴と靴下に替わる頃である。

携帯電話など想像もつかず、電話をかけるため電話局に出かけた記憶もある。電話はお金持ちしか持っていなかった。氷水を食べなくなったら、氷屋さんに行って氷を買ってきて、カンナのような刃のついたもので削り、シロップを掛けて食べた。買いに行ったり、削ったり、散々汗をかいいた後に食べた氷水は、たまらなく美味しかった。その時代に比べれば、今はまさに天国といえよう。

10 月 1 日は朝日神社のお祭りで、多くの出店が並んだ。焼きそば・焼きイカ・焼きト

ウモロコシ、綿飴、お面、風車(かざぐるま)、針金で作った鉄砲、模型飛行機、金魚すくいや水ヨーヨー(＝ゴム風船に少し水を入れ、ゴムヒモで弾ませ遊ぶ)など……。また、神社の横の空き地には櫓(やぐら)が組み立てられ、そこで漫才や歌や踊り、手品などが披露された。どうってことないのに、なぜかうきうき感があつた。頼まれて、店番をしたこともある。子供なりに、時代を楽しんでいたのかもしれない。道路工事でお祭りをやめた翌年から、なぜか行われなくなつたと聞いている。

子供の遊びは、缶蹴り、水雷(すいらい)ぼっかん、パッタ(＝メンコ)、独楽(こま)、「だるまさんがころんだ」、馬跳び、ビー玉、陣地取り、チャンバラ、ゴム飛行機など。女の子は、おはじき、ゴム跳び、お手玉などをしていた。テレビゲームなど無い時代、日が暮れるまでよく遊んだ。

ちょっと遠出したくなると、そのころの営林署の脇を通って、一本松(瞑想の松)まで遊びに行った。行く途中に小さな沼があり、腹の赤い「イモリ」が住んでいた。

僕が3～4歳の頃までは、「軽便」が北仙台方面から梅田町を通って走っていたようだ。「仙台鉄道」といい、長い煙突のついた小型列車で、仙台の通町と北に位置する古川市を結んでいた。愛称は「軽便っこ」、亀谷町内会長のように、今なお愛してる人達も多い。インターネットで調べると、「ひころの風」など、牧歌的水彩画と音楽からできた説明も見られ、楽しい。大正時代から走っていたが、昭和23年頃の台風で鉄橋が壊れ、やがて廃止になったという。

小学校の遠足や登山は、泉ヶ岳、太白山(仙台富士・おにぎり山)、山寺(立石寺)、松島、鳴子峡などで、自然を十分楽しむことができた。

今でも、市内にある「台原森林公園」「水の森公園」「東北大学植物園」に行くと、「ここが街中？」と思わせてくれる。新川ラインなどのハイキングコースもいい。水もうまく、ニッカウキスキーの工場が建つ理由も分かるようだ。

ちょっと寒いけど「仙台が好き！」という人は多い。僕もそのうちの1人である。東京から来た友人は、「空が澄んでる！ 空気がうまいなあー」と感激していた。

暮らしやすい街を守るのは、我々熟年(老人?)の役割なのかもしれない。昔を振り返ると、ふと、そんな感じが頭をよぎる。今しばらくは、仙台の街 そして上杉(北七東部町内会)の良さを味わい、移り行く姿を見たいものだ。(2016.12)

参考) 昭和20年7月10日、米軍のB29・100機が1万発以上の焼夷弾を落とした。仙台は焼け野原となり、5万人が被災、城の大手門(国宝)も失った。戦後、アメリカの進駐軍が駐在することになり、川内(現・東北大学教養部)に軍本部が置かれていた。